て形成されるという認識で共通している。いうならば思想の「存在被拘束性」Seinsgebundenheitを共通基本概念としているのである。そうした意味で知識社会学はイデオロギー論に対して近似的位置にいるが、思想の枠組構成とその分析手続きがイデオロギー論より格段に精緻化、体系化されているといえるのではないか。

知識社会学の概念体系を確立したカール・マンハイムは主著「イデオロギーとユートピア」(1929) においてイデオロギーを特殊的／一般的、個別的／全体的、価値評価的／非価値評価的という軸で区分し、一般的・全体的・非価値評価的イデオロギー概念に準拠した分析を行なえば客観的思想分析が可能だとして、そこに＜相関主義＞としての知識社会学が成立するのだと述べている。こうしたマンハイムの思想分析方法論から、私自身多くの示唆を得ることができた。

いま一人、この領域で卓抜した視点を教示してくれた存在としてミシェル・フーコーをあげておきたい。「言葉と物」(1966)、「知の考古学」(1969) で注目を集めた前半期のフーコーは、構造主義言語学の路線の枠内でルネサンス以降、20世紀初頭までの人文語科学の成立と転換をエピステーメ＝認識パラダイムという基本概念によって解明した。各時代区分内での人文諸科学の具体的構造と相互連関分析は精密かつ大胆で瞠目させられた。しかし、エピステーメの転換を要因説明もないままに非連続的にとらえている方法論に関しては到底評価する気にはなれなかった。

最後にいま一つ、比較的近年になって読解したピエール・ブルデューの著作「社会学の社会学」(1980) の中の一章「＜場＞のいくつかの特性」を通して私は社会思想史方法にとってきわめて有効な分析手法を学びとることができた。

ブルデューの論旨を要約すると＜場＞champとは各関係者の諸位置の構造化空間であり＜思想場＞＜文学場＞＜美術場＞など多くの領域が設定されうる。そしていずれの＜場＞においても基本的構成要因として、(1) プロブレマティック—歴史的帰結として発生、(2) 準拠体系—思想、(3) 指標体系—リーダー的存在が相互作用する。そして＜場＞には他と程度の異なる自律度が存在する。

特定時代の特定＜場＞として＜小説場＞を設定してみる。そこでは特定出版メディアシステム内部で複数の雑誌に関連する作家たちが特定の「賭け金」(獲得目標、地位) と利害をもって参入している。そして同一＜場＞内の複数メディア間、単一メディア内でもディスクールの近似、対立を伴なう動的過程が機能している。

ブルデューはさらに思想史的分析作業をテクストの「読解」(レクチュール) として位置づけその分析手法を提示している。＜内的読解＞は言語形式、意味内容、テクスト構造など構造主義、記号論的手法を適用して分析する。ブルデューが重視する＜外的読解＞とは、コンテクストの拡大的解釈とでもいうべき手法で、テクスト生産者の社会特性—出身階層、出身地域、出身大学—と準拠集団の関連づけ、さらに彼らの生産を規定した中範囲の諸要因—マクロの経済状況、政治争点、技術要因と波及度など (後半節は私が一部追加修正している)。ブルデューの外的読解の手法を十分に活用した著作としてアンナ・ボスケッティの「知識人の覇権」Sartre et 〈〈les Temps Modernes〉〉(1985) は大きな示唆を与えてくれた。

以上にのべて来たように60年代から80年代にかけて私は社会思想史方法論について各種の方法視点から学びながら考察を重ねて来た。そしてこの分野について現在考えていることの一つは、社会思想史の分析対象のほとんどは個人としての思想家であるのだが、その対象を分析する研究者自身の視点を客観的に相対化することが必要でないか、またそうした視点の設定はいかにすれば可能なのだろうかというプロブレマティックである。

Ⅲ　文化の記号論的分析への関心

80年代になってから私の研究上の関心は文化構造論、とりわけ文化記号論に傾斜するようになっていった。その理由は一つには社会思想も当然ながら哲学、政治思想、経済思想など隣接諸領域と重合しているのが常であり相互関連的視点がどうしても求められること、二つには80年代中頃、日本の思想、理論諸領域では構造主義、記号論ブームとでもいうべき状況が顕在化し、レヴィ＝ストロース、フェルデナンド・ソシュールなどの著作